

新春スペシャル まなび場 天声人語

15文字の世界 挑戦中

開始から1年半が経った「まなび場天声人語」。指定されたお題に15文字以内の見出しをつける「見出し講座」にはこれまで約1万5千件の応募が寄せられました。家族で、個人で、クラスで。楽しく取り組み続けているみなさん取材しました。

素直な気持ち 母と紡ぐ

大坪咲さん(13)
周さん(46)

和歌山県の中学1年生、大坪咲さん(13)は2021年7月の企画開始時から、母の周さん(46)と応募を続けてきた。初回の見出しは「イルカもつらい『既読スルー』」。仲間からの反応がなくて鳴き声をあげるイルカの語だ。「気持ち悪い像するのが楽しかった」。言葉を組み立てる面白さも知った。

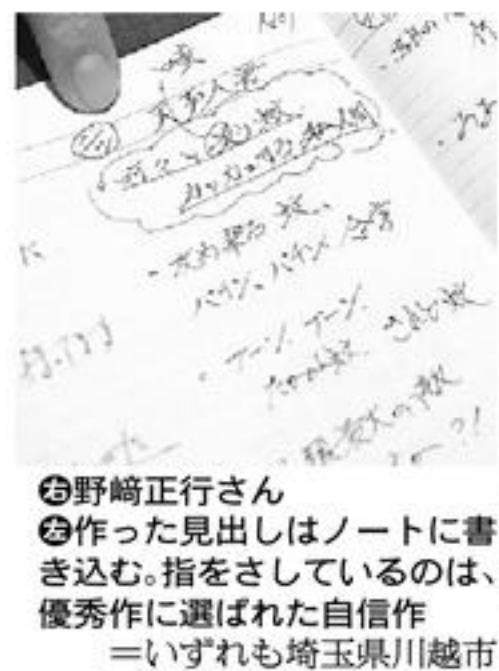


大坪咲さん(右)と母の周さん
和歌山市、周さん提供

ことを知った。周さんの解説を聞いた咲さんが口にした言葉は「本当の私、出せないなんて」。素直な表現にはっとした周さんは「それをそのまま見出しにすれば」とアドバイスした。周さんは「大人は文章をつくるようにして難しく考えてしまいうけれど、これが子どもならではの視点なのかな」と感じたという。アフガンの回は周さんの見出し「ブルカで覆われた少女達の未来」が優秀作に。本気になって見出しを20個以上書き出す母を見て、咲さんも「負けたくない」と感じた。今の目標は母のように語彙や表現力を豊かにすること。類語辞典を引きながら挑戦を続ける。(箕田拓太)

午前4時 目覚める言葉

野崎正行さん(64)



野崎正行さん
作った見出しはノートに書き込む。指をさしているのは、優秀作に選ばれた自信作
=いずれも埼玉県川越市

2作品もそう。蚊がテーマの「何々と囁く蚊 カッパする人間」では、「虫」という字が入った「囁く」という漢字をあえて用い、「か」という音を色々な言葉で繰り返した。もう一方のローカル線の苦境を扱った「夢路線 現実路線 いかにせん」では、語尾で韻を踏んだ。百人一首で使われる掛けことばなどの技法もよく意識する。紙面に掲載される編集者や他の投稿者の作品から様々なものの見方や表現方法を学べることも面白いという。見出しは記事に興味をもつ最初の扉のようなもの。(納得いく見出しが決まったなどと思ったとき、すぐ気持ちがいいんです)(小瀬康太郎)

note社広報
森本愛さん



見出しをつける力は仕事でも生かせるという声も。投稿サービス「note」を運営する、note株式会社会社広報の森本愛さん(38)は「まなび場」でヒントを得ていると話します。

見出しをつけたり考えたりする作業は、企業広報の仕事にも通じるところがあると思います。この会社に入るとき、代表に言われて印象的だった

見出しの技術 仕事にも

のは「広報は会社の編集者」という言葉です。社内のあるゆる素材やニュースを、世間はどう届けるか。橋渡しをしてほしいと言われました。橋渡しをする上で、大切なスキルは「伝える力」だと思っています。伝えたいことのなかで、一番大切な箇所はどこか。相手の目を引くのはどこか。普段社内ですべての言葉が、社外や世間に伝わるのか。こうした勘所を、見出しを考える作業で訓練するのは、有益だと思っています。

「まなび場」は、友人にボツドキャストを勧められて知りました。編集者の解説は、裏話や考え方、テクニックを聞けるので楽しいです。仕事でも使えると思った解説は、チームのメンバーと共有することも。プレスリリースの確認などの際に「タイトルだけを見て中身がわかるか確認を」「声に出して読むと語呂の悪さに気づくので、必ず最後に声に出しましょう」と伝えました。文字数が限られるSNSの投稿にも応用できると思っています。

新しい社員が入ってきたときに、チームでお題に取り組みむのもいいですね。見出しの取り方で「ここを大事だと思っただけ出したんだ」と、その人の価値観も見えてくるかもしれません。(聞き手・望月愛実)

惜しい見出し・考え方のコツ 音声で

「見出し講座」では毎月第4月曜の紙面で優秀作5作を紹介してきました。惜しくも候補から漏れた見出しや、紙面で伝えきれない考え方のコツは朝日新聞ポッドキャストで紹介しています。選考に携わった編集者が経験も踏まえて解説しています。解説のポイントは、お題の文章に応じて様々です。「防災」の回では、見出しを読者の心に刻んでもらうために「標語でなく、具体的の中身を伝えるものに」とアドバイス。「モー〇〇」や

「ほっと〇〇」といった見出しが並んだ「ホットミルク」の回は「言葉遊びは『沼』に注意」と、一歩引いて意味が通るかどうか確かめることを提案しました。「方言を盛り込むときの注意点」「ひらがな・カタカナ・漢字の使い分け」などについても話しています。右上のQRコードにアクセスすると、これまで配信した計20回分を聞くことができます。ぜひお楽しみください。



他の人の作った見出しを見て、良いと感じた作品を伝え合う鎌倉女学院高の生徒たち=神奈川県鎌倉市

自由に 生き生き

見出し作りの授業に取り組む、そのモチベーションは？鎌倉女学院高校の生徒たちは「勉強とは違う自由さ」「気分転換になる」と話す。沖縄の言葉が消滅の危機にあるというお題では、ともに2年生の立和名美鈴さんの「沖縄の言葉の葉 枯れぬように」、小山陽香さんの「紡げ 葉 『うちなーぐち』が

そろって優秀作に選ばれた。見出しに「自由さ」を感じるのは立和名さん。「言語がいつまでも大輪の花を咲かせますように」との一文に植物の命を連想。文中にはない「言の葉」をひねり出した。小山さんは「紡げ」に思いを込めた。中学生の時、好きなアーティストが使っていて印象に残ったフレーズだ。「エンタメも、私には言葉の勉強だった」。そう実感できたという。

集中30分 伝わる個性 鎌倉女学院高

文章を読み、書き手の言いたいことを理解する。内容を要約する。それだけでなく、受け取った思いを鮮やかに伝えられるようになってほしい。鎌倉女学院高校(神奈川県)の齋藤愛音先生(41)はそんな思いから、2年生の現代文の授業に見出し作りをプラスしている。昨年12月初旬の2年2組。お題の天声人語が前方のスクリーンに映し出された。ブックカバーをかけて本を読むことで筆者と秘密を共有している気持ちになれる、という内容だ。先生は「秘密」「秘密の事柄」「コッソリ」「ひそかな通信」「コッソリ読み」の五つの語句を緑色で囲んだ。見出しのキーワードになりそうな言葉を先に示したうえで考えさせる。「そのまま見出しに組み込むか、違う言葉に置き換えるのかはみなさん次第」問いかけに生徒も応える。見出し作りは30分一本勝負だ。各自が授業で使っているノートパソコン端末「クロームブック」に黙々と打ち込む。できた見出しは、授業支援アプリ「ロイロノート」を通じて先生に送ると、クラスメートの端末にも表示される。今度は目線を変えて「自分が選者ならどの見出しを選ぶか」を考え、3〜5人のグループに分かれて伝え合う。「秘密の通信 盗み見禁止!」「読書の秋 実る私の内緒事」「心の内 ブックカバーに包み込む」。自力で練り上げられた36作品は多種多様だ。「禁止って言われると見たくなるね」「『秋』と『実る』がかかっている感じがいい」。みんなの表情が和らぐ。東本連佳さんは「小さなヒミツはカバールの陰に」と、「秘密」を力タカナに置き換えた。「幼い頃に誰もかかっていた『可愛い隠し事』のイメージを表現したかった」。見出しを見た味野和愛さんは「文章には小学生の読書の話も出てくる。漢字の『秘密』は重々しいけれど、これなら小学生も秘密を共有している感じが出ている。いな。込めた思いが伝わった。」「表現したいことが一番伝わる言葉を探す。コミュニケーションのための力」。齋藤先生はそう感じている。(箕田拓太)

昨年12月7日付の見出し まだ募集中!

2022年12月7日付の天声人語を読み、15字以内の見出しと、考えた理由(100~200字)を投稿してください。お題の文章は1月1日の紙面で再掲しています。理由を含めて優秀作を選考します。優秀作は1月23日の朝刊で紹介し、図書カード3千円分を差し上げます。応募は専用サイト<http://t.asahi.com/manabibaten.jin>(QRコード)から。1人で複数の応募も可。郵送の場合、住所・氏名・年齢(在学中の場合は学年も)を記入の上、〒104-8011 朝日新聞コンテンツ編成本部「まなび場天声人語」係へ。締め切りは1月15日(消印有効)。抽選で20人に、新聞を使った学びに役立つグッズを差し上げます。お問い合わせはmanabibaten.jin@asahi.comへ。

